

## 第2回 『戦争体験談語り継ぎ部養成講座』 藤原 昭三 氏(H25.11.26)

### ～鵜野飛行場工事事務所・川西航空機製作所・水道工事会社の勤務時代について～

私は鵜野飛行場の工事が始まった前後から、川西航空機製作所の下請事業で水道工事を請け負っていた、大阪に本社があります「須磨商会」に敗戦後の1945年8月15日まで務めておりました。今日は、その2年前後の話をしようと思っています。

鵜野飛行場は1943年、昭和18年3月に工事が始まりました。私が勤め始めたのは、5月27日です。なぜ、5月27日という日を鮮明に覚えているかというと、戦時中は陸軍記念日が3月10日、海軍記念日が5月27日で特別な日でした。3月10日は日露戦争で、奉天会戦で勝利した日で、陸軍記念日です。それから、5月27日は日本海海戦という、日露戦域の時に、当時ロシアのバルチック艦隊を日本海で撃滅した日で、海軍記念日です。その日に勤めましたので、よく覚えています。

1943年の社会背景は、1月にはニューギニアで日本軍が全滅しております。2月はソロモン群島におきまして、ガダルカナル島から日本軍が撤退、いわゆる退却を始めました。そこから、どんどんと日本が敗戦に向かうわけです。4月は山本五十六元帥が戦死されました。7月には、国民徴用令が発令されました。当時、若い20歳前後の方はほとんど戦地に行っています。したがって、軍事工場で働く方がどんどん少なくなってきましたので、徴用令が発布され、男子は12歳から60歳、女子は12歳から40歳の方が強制的に徴用令で軍事工場へ徴用されて、強制的に勤めさせられました。10月には、学徒出陣。最近よくテレビでも放送されますけども、神宮外苑の雨の中で学徒出陣壮行式が行われました。

その当時に、私は鵜野飛行場の工事事務所に勤めていました。それからしばらくして、川西航空機の事務所に変わりました。変わったと言いましても、結局は飛行場関係の作業ですので、飛行場に起こった事は、全部と言いませんけれども、だいたい見聞きをしています。その間の心に留まっている事を、今日はお話したいと思います。

飛行場の建設工事は、朝鮮の方々が主役と言いますか、工事任務というのは朝鮮人の方が多かったです。「飯場」というのは、ご存知でしょうか。ご飯の“飯”と場所の“場”と書くのですけれども、そういう簡単な所で寝泊まりをして、飛行場の整地作業に従事しました。飛行場はほとんどが土木作業で、高い所から低い所へ崩して行って平坦地にしました。最初は朝鮮から来られた方、おそらく強制連行という方もあったか分かりませんが、主役は朝鮮の方々でした。

私が勤めておりましたのは現場事務所です。何処にあったかと申しますと、鵜野町の現在は神戸大学の農学部がある辺りが、当時の現場事務所になっていました。そこは現場の工事の指揮をする指令塔のようなもので、指揮をする監督の方々がここで色々と計画をして工事を進めていきました。務めた最初の日に、工事事務所の所長から指示された事は、「ここは海軍の基地であるから秘密事項が非常に多い。だからその点に充分気を付ける様に」と、これを第一日目に釘を刺されました。

当時、飛行場内には115戸の民家がありました。その115戸の民家が全部、飛行場の建設予定地の外へ強制移転になりました。大体、飛行場の南の方へ移転されたと思います。北の方は、ごくわずかだったと思います。

民家の移転に伴って、墓地も移転になりました。私が通っていた道筋にも墓地があり、勤務が終わって帰る時に、当時は土葬ですので、墓地を掘り返してご先祖さんのお骨を丁寧に一つ一つ掘り上げて、移転をされる姿を見ました。飛行場という軍事施設を作るには、こういう事があるんだなあと思いました。

飛行場を作るには広い土地が必要で、高い所から低い所を埋めて平坦にしますので、丘を削って、池や沼を埋めていきます。その作業はトロッコという台車の上に杵を乗せて、その中に土を盛り上げて土を運びます。監督をされていた方の話では、土くずの下に人が埋まるということもあり、そういう時には樽で土の上から埋まった人の上へ酢を流すと呼吸が楽になるとお聞きしました。

飛行場が徐々に平坦になり、まず滑走路が第一に工事されたようです。だんだんと滑走路が出来まして、1943年10月1日に開設されました。3月に始まって10月ですと、半年あまりの突貫工事で滑走路が出来たという事になります。

10月1日にまず滑走路だけが出来ました。三重県の鈴鹿に海軍の飛行場があり、練習日にはこちらの鶉野へ来ました。ここで、予科練習生という通称予科練という「若鷲の歌」に“七つボタンは桜に錨”とあるように、非常に見栄えの良い制服をきた若者たちの軍隊の飛行訓練が始まりました。

飛行場の南の方の端にずらっと黄色と深緑色の練習機が十数機並んでいました。それは最後には特攻機になるのですが、中国の若手軍と練習をするのです。その練習機を私どもは「赤とんぼ」と呼んでおりました。その練習機には乗る席が3つありました。一番前が練習生で航空機の操縦訓練する人、真ん中が定かではないのですが通信兵が乗り、一番後ろに教官が乗ると聞いておりました。3人乗って猛訓練をしていました。

予科練生は滑走路の土を盛り上げて、その上を大きなローラーの機械で何回も転圧したり、「赤とんぼ」の操作練習をしたり、そして3か月程練習すると次の任地へ変わっていくということが繰り返されました。

後の資料によって分かったのですが、当時は、北条高校の少し東にある鶉野北の奉天池から中野町に向かって長さ1,200m、幅200mの滑走路がありました。現在残っているコンクリートの滑走路は、長さが1,200m、幅60mで、紫電の川西航空機が制作していた海軍戦闘機のテストパイロットが発着する滑走路でした。

現場で見ていると、最初の練習ですのでスムーズに離着陸できず、急に粉を噴いてバウンドして着陸しているのをよく見ました。工事事務所の方の話では、あるとき、練習のミスなのか、スムーズに降りられず急角度で降りたため、戦闘機の脚の片方が折れ、折れた方を中心に丁度コンパスを回す様に回転したことがあったそうです。そして、その後どういう事があるかと思って心配して見ていたら、3人飛び降りてきて、操作ミスで飛行機を大きな故障をさせたという責任があったのか、教官がその練習生をひどく殴っていたそうです。その話をされた監督さんは「親が見たらどう思ってやろうなあ」と事務所で話されていたのを聞きました。そのころ、私は14歳、今でいう中学2年生頃で、当時は、国の教育で、「とにかく軍隊に入らないかんと家では知らん」という時代でしたので、そういう事が起こった話を聞いても、私自身は「別に戦争中やから」「戦時中やから死ぬのは当たり前」という感じでおりました。そして、その後、私も海軍を志願しました。

その頃は、普通の家庭は衣食住の全てが何にも無い状態、不足していた時代でした。住む家はありましたので、何とか過ごせたと思いますけど、衣類、食べ物ほとんど配給の時代でした。タバコは10日に1回とか1日3本とか言ったような状態で、物資不足が極端な時代でした。

飛行場で働いている人達は、「普通の常雇で受け取れ」という事がありました。常雇とは常に雇うと書きま

す。その賃金が1日3円60銭です。ここでは、仕事をした量によって金額が決まり、多いときは1日5、6円〜7、8円の給料だったようです。

一方、私は職業的には見習い事務員という事だったのですが、頂いた辞令は「給仕」で、1日1円15銭でしばらく働いていました。その後すぐに、男子の給仕採用はいけないと国で決められまして、次に貰いました辞令が、雇員と書いた「雇員」という事でした。下っ端でも、内務省の職員という事で腕章を巻きました。使いくかたつたですけれども、そういう状態て勤めていました。

1年半ほど内務省姫路施設工場の事務職に就いて、その後仕事を変りました。変わった理由は給料が安かつたことと、私用とか公用とかごちゃ混ぜで色んな事を仰せつかつて、そういう事が嫌になつたんだと思います。川西航空機の方で人を探しているという事で、そつちへ変りました。

変わった先は川西航空機製作所の下請けの水道工事の会社で、当時は「須磨商会」と言い、今どうなつているのかインターネットで探してみましたが、現在はもうやつておりませんでした。

そこでは、姫路海軍航空隊の病院へ私一人が派遣され、水道工事をしていた時の事が特に印象に深く残つています。病院には海軍兵が病気になつたり、怪我をした人が入院していました。

予科練生達はずつと飛行練習をし、時には墜落しました。不時着です。ある日、練習中に事故が起つたのでしよう。飛行兵が戸板で一人を乗せて担いで入つて来ました。飛行靴というのは、ブーツの長さの半分くらいなので半長靴と言つていました。飛行機を操縦する時には、その靴を履きます。戸板の上に一人横たわつておりまして、彼の飛行靴からザーツと血が流れ出るんですね。大きな怪我でも、生きていたから良かったですけれども、もしかしたら息絶えとつたかもしれせん。そういう事が、病院で務めておりました時には日常的に出遭いました。

予科練生が飛行訓練中に、どこかに不時着し、死傷者が出ると練習が一日休みになります。飛行訓練を全部止めるわけです。敬意を表すというのか、そういう事で休むのが通常でした。病院へ死傷者が運ばれていく時は、ピタツと練習が止まります。飛行機が練習場に発着しない時は、何かあつたんかなあという気持ちで私は水道工事をしておりました。

ところが、戦争が4年、5年、20年と長くなつていくと、それもなくなりました。どんな場合でも、どこかに墜ちたという事を聞いたときでも、練習をやつていました。それだけ事態は切迫しておつたという事です。それでも、戦争というものは無残なものだなあという事は、あまり感じなかつたんですね。やつぱり国の文部の教育のせいというのか、従う教育というのは恐ろしい事やと思います。

それから、川西航空機の紫電改のことを覚えておりますので、お話しします。

紫電改は紫の電気と最後の紫電という改めという改と書いて、更に改良した戦闘機という意味です。この飛行機の工場は、川西航空機の鳴尾という所、当時は武庫郡(今の西宮市)、武庫郡鳴尾町に本社がありました。鳴尾で作つていた飛行機を、今度は姫路でも作るようになりました。姫路からほぼ完成品を鶴野の方へ持つて来て、鶴野で組み立て直して、テストをやつていました。そのテスト飛行中に色々事件がありました。

紫電改という飛行機は、キャブ(脚)が弱いと当時から言われておりました。テスト飛行中に脚が折れ、滑走路で飛行機が逆立ちしたみたいになつている姿を見た事もあります。

それから、現在も残つている紫電のテスト用の滑走路の一番端の方に、今で言うプレハブ式の2階建ての建物があり、指令塔になつていました。ある日、その上へ飛行機が低空で降りてきて、半長靴が墜ちてきたんです。その中にメモが入つておりまして、『キャブが出ない。』という内容だつたそうです。今から考えたら、通

信機で通信出来なかったのかなと思います。色んな操作を試みたけれども、キャブが出ない。おそらくキャブが出ないから、そのまま着陸するという、こういう事じゃなかったかと思います。それは、後から聞いた話で、その時は知りませんでした。でも、近くで仕事をしていたので、墜ちた時は見ました。その後どうなったかというのは、ご想像にお任せしたいと思います。キャブなしでの着陸です。

今から5～6年ほど前、川西航空機製作所の本社があった西宮の鳴尾町、当時の鳴尾村が鳴尾村誌を作られ、それを頂きました。鳴尾村誌を見ますと、紫電改を作った当時、海軍では一番新しい立派な精鋭機と言われておりました。海軍は1,500機注文したそうですが、納入できたのは500機だけだったそうです。500機納入して、戦争が終わり、敗戦になりました。川西航空機製作所は、順調にどんどん紫電改を生産出来たという事ではないわけです。キャブが弱いために、鶴野飛行場のテスト中でも、かなり飛行機が墜ちたのを私は見ました。生産過程で死の犠牲もかなりあったのではないかと考えます。その中の1機が北条鉄道の網引駅付近で不時着し、列車転覆事故を起こしたその1機です。

鶴野の川西航空機に勤めていた時に、いわゆるアメリカのグラマンという艦載機の空襲に何回か遭いました。この空襲を思い出しますと、今でもゾーッとします。ダダダダーッと、グラマンが急降下で撃ってきますと、不思議な事にそれが全て自分をめがけて撃ってくる様な気がするのです。川西航空機には大きな格納庫が3棟ほどあり、空の上からよく見えますから、それを目的に来るのです。格納庫の付近で仕事をしていたら、バババババーッと撃ってくるわけです。そういう時は目標物の航空機の格納庫から離れ、一生懸命防空壕へ逃げました。ある人に聞きましたら、「にたっと笑いながら撃っていた」と言っていました。そんなの見るところの話ではないです。逃げるのに必死でした。

それから、畔や畑に穴が開いているので、そこに弾が入っているのではと思って掘りますと、弾が出てきたんです。今、艦載機で撃ったばかりで煙硝の臭いがぷーんとするんですね。その煙硝の臭いは今でも覚えています。かなり大きな機関銃の弾で、穴の大きさは5～6cmで、弾の直径は1cm程ありました。「こんなもんが、体のどこに当たっても一発やなあ」と一緒に襲撃を受けた仲間と話していたのを覚えています。

もう一回空襲に遭いましたのが、海軍の志願兵のときです。当時は若い14～15歳位になると志願制ということで、志願と言いましても強制的に軍隊に入りました。仲間と一緒に、北条庁舎の辺りの北条小学校、その当時の女学院へ試験を受けに行くために電車に乗ると「キーン」という音がするんですね。グラマンが来たら「キーン」という様な金属音がします。今の旅客機のように「ボーッ」という音ではないです。その音がすると、「あっ！来た！」とわかるのですが、かなり遠かったので、まさかこの乗っている北条線の列車がやられるという事は考えませんでした。法華口駅ぐらいに来た時に「キーン」と聞こえたので、「これはまた川西がやられるなあ」と思っておりますと、今度は列車が狙われました。列車が当時は機関車ですので煙がもくもくと、線路の上に行くのがよく見えたのでしょう。空襲でバリバリやられる間にも、列車は止まらずに長の駅まで行きました。当時は交通機関が何も無いので、客車は満員です。長の駅で止まった時に、また機銃掃射され、列車が止まったら皆バーッと降りました。もう本当に蜘蛛の粉を散らすように逃げるとは、あの事ですね。畑とか田んぼへ散って逃げました。幸い死傷者は出ませんでした。逃げている所を2回くらい繰り返して撃たれました。今でもあの横を通ると、その事を思い出します。

この身を持って空襲に遭ったのは、川西航空機の現場で遭ったのと、長の駅で遭った2回です。空襲で機銃掃射でやられると本当に怖いんです。先程も言いましたが、本当に自分をめがけて撃ってくる様な気がするのです。銃の「バリバリーッ」という音がして、皆真っ青です。

私は、海軍の志願兵に志願し検査を受けて、間もなく戦争が終わりましたので、軍隊には行きませんでした。

当時、川西航空機製作所へは網引から法華口まで北条線に乗って、そこから歩いて通勤していました。通勤の時に思い出深い事が二つあります。

一つ目は、法華口駅で勤務が終わって帰る時のことです。予科練生が鶴野で3ヵ月間の訓練を終えて、別の任地へ行く。何処へ行くか私は分かりませんが、おそらく特攻隊として九州の方へ行くか、また他の飛行場で練習の為に移動するのでしょうか、きちんと正装をしていました。軍隊には雑納と正装というのがあり、正装というのは儀式用のちゃんとした服装で、雑納というのは全部一つの袋に所帯道具が一切入った物を雑納と言いました。それを持って、5～6人ずつ何回か移動する人達に会いましたが、その人達はおそらく鶴野で所定の訓練を終えて移動となり、おそらく私は特攻隊として九州の方へ行った人が、その中にいたのではないかと思っています。これは後で聞いた話ですけども、当時、私どもが“赤とんぼ”と呼んでおりました練習機が、爆弾1個抱えて特攻隊で沖縄まで行ったという事を聞きました。

もう終戦というか敗戦が近くなってきますと、鶴野には飛行機はもう1機もなくなりました。したがって、練習もしません。後は、川西航空機で制作した飛行機を何処へ逃がそうかと、戦隊壕を作り、そういう所へ運ぶという、そんな事例もありました。

二つ目は、設営隊の面会で忘れられない事があります。若い学生が中心となった設営隊というのがありまして、軍隊の若い人達自身がする事がないから、今で言うと土工(どこう)、当時は土方(どかた)と言っていました。土工工事をやっておりました。設営隊は5～60人位の大きな班が2班あり、毎日通勤の時に一緒になりました。法華口の駅前が広いので、朝、法華口駅の前の広場に整列をして、そして夜、帰る時には設営隊も一緒に帰って行きました。

当時、家族が軍隊に行っている子どもに会いに行くという事を面会と言っていました。ある夜、ちょっと薄暗い白夜でした。一人のお母さんがその設営隊の中の若い、おそらく学生ではなかったかと思いますが、法華口の駅の中で会っていました。法華口の駅はコの字型に一枚板で座る座席があり、その中央でお母さんと子どもが面会されていました。当時は、食べ物もない、着る物もない時代で、軍隊でも食べ物がなくて腹が減るわけです。ですから、面会でお母さんが食べ物を持って来て子どもに食べさせていました。我々は「ヒゲ班長」と言っていたんですけど、軍隊には規則あり、それを破る者がいないか監視するために、巡視をする班長がおられました。通勤列車は乗客が多いですが、多くてもやっぱり巡視があるのです。私が非常に感激するのは、そのヒゲ班長が入口に立って、見回りがあつたら、見張りをしてかばってあげていました。私が出て行く時に、「何で今日はこんな所にいるのか」と思っていたら、その中で軍隊の帰りの二十歳ちょっと前の子どもが、お母さんに何か食べさせてもらっていました。その日も、ヒゲ班長が、その見張りに見つからないように入り口に立っておりました。お母さんが班長に「一緒に食べましょう。」と言うのですが、「私はここで見てます。」と言って動きませんでした。無事に見つからないように、食べる間にも色々と話したんだと思います。そういう情景を見まして、やっぱり軍隊にもこういう人がおるんだなぁと感じました。

色々はまだ話したい事もございますが、また機会がありましたら、お話ししたいと思います。今日は、これで終わりたいと思います。ありがとうございました。